

精神医学

1 構 成 員

	平成 26 年 3 月 31 日現在	
教授	1 人	
病院教授	0 人	
准教授	1 人	
病院准教授	0 人	
講師（うち病院籍）	2 人	(2 人)
病院講師	0 人	
助教（うち病院籍）	4 人	(2 人)
診療助教	1 人	
特任教員（特任教授、特任准教授、特任助教を含む）	0 人	
医員	2 人	
研修医	2 人	
特任研究員	5 人	
大学院学生（うち他講座から）	2 人	(0 人)
研究生	0 人	
外国人客員研究員	0 人	
技術職員（教務職員を含む）	0 人	
その他（技術補佐員等）	11 人	
合計	31 人	

2 教員の異動状況

森 則夫（教 授）	（平成 8 年 4 月 1 日 ～ 現職）
鈴木勝昭（准教授）	（平成 25 年 4 月 1 日 ～ 現職）
岩田泰秀（講 師）	（平成 19 年 4 月 1 日 ～ 現職）
竹林淳和（講 師）	（平成 23 年 4 月 1 日 ～ 現職）
和久田智靖（助 教）	（平成 21 年 4 月 1 日 ～ 現職）
中里一貴（助 教）	（平成 24 年 10 月 1 日 ～ 平成 26 年 3 月末日退職）
横倉正倫（助 教）	（平成 24 年 4 月 1 日 ～ 現職）
亀野陽亮（診療助教）	（平成 25 年 4 月 1 日 ～ 現職）
栗田大輔（助 教）	（平成 23 年 4 月 1 日 ～ 現職）
市川太祐（医 員）	（平成 25 年 4 月 1 日 ～ 平成 26 年 3 月末日退職）
水野大地（医 員）	（平成 25 年 4 月 1 日 ～ 平成 26 年 3 月末日退職）

3 研究業績

数字は小数 2 位まで。

	平成 25 年度	
(1) 原著論文数（うち邦文のもの）	6 編	(1 編)
そのインパクトファクターの合計	6.77	

(2) 論文形式のプロシーディングズ及びレター	0 編	
そのインパクトファクターの合計	0.00	
(3) 総説数 (うち邦文のもの)	3 編	(3 編)
そのインパクトファクターの合計	0.00	
(4) 著書数 (うち邦文のもの)	3 編	(3 編)
(5) 症例報告数 (うち邦文のもの)	0 編	(0 編)
そのインパクトファクターの合計	0.00	

(1) 原著論文 (当該教室所属の者に下線)

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. Kameno Y, Iwata K, Matsuzaki H, Miyachi T, Tsuchiya KJ, Matsumoto K, Iwata Y, Suzuki K, Nakamura K, Maekawa M, Tsujii M, Sugiyama T, Mori N: Serum levels of soluble platelet endothelial cell adhesion molecule-1 and vascular cell adhesion molecule-1 are decreased in subjects with autism spectrum disorder. *Mol Autism*. 4(1):19 (2013.06) [-]

インパクトファクターの小計 [-]

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの (学内の共同研究)

1. Sakurai N, Tsuchiya KJ*, Suzuki K, Wakuta M, Takei N, Mori N: Children's behavioural problems are perceived differently by their teachers and parents : The Hamamatsu School Survey. *J Brain Sci*. 40:28-53 (2013.04) [-]

インパクトファクターの小計 [-]

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. Balan S, Yamada K, Hattori E, Iwayama Y, Toyota T, Ohnishi T, Maekawa M, Toyoshima M, Iwata Y, Suzuki K, Kikuchi M, Yoshikawa T*: Population-specific haplotype association of the postsynaptic density gene DLG4 with schizophrenia, in family-based association studies. *PLoS One*. 8:e70302 (2013.07) [3.73]
2. Balan S, Yamada K, Iwayama Y, Toyota T, Ohnishi T, Maekawa M, Toyoshima M, Iwata Y, Suzuki K, Kikuchi M, Ujike H, Inada T, Kunugi H, Ozaki N, Iwata N, Nanko S, Kato T, Yoshikawa T*: Lack of association of EGR2 variants with bipolar disorder in Japanese population. *Gene*. 526:246-250 (2013.09) [2.20]
3. Muramatsu-Kato K, Itoh H, Kobayashi-Kohmura Y, Murakami H, Uchida T, Suzuki K, Sugihara K, Kanayama N, Tsuchiya KJ, Takei N.: Hamamatsu Birth Cohort (HBC) Study Team. Comparison between placental gene expression of 11 β -hydroxysteroid dehydrogenases and infantile growth at 10 months of age. *Journal of Obstetric and Gynaecology Research* **40**:465-72, 2014. [0.841]
4. 梅田亜沙子, 惠藤絢香, 岩永竜一郎, 鈴木勝昭*, 辻井正次: 広汎性発達障害児における感覚刺

激への反応異常 日本語版 Sensory Profile による評定. *小児の精神と神経*. 53: 353-365 (2014.01)

[-]

インパクトファクターの小計

[6.771]

(2-1) 論文形式のプロシーディングズ

(2-2) レター

(3) 総 説

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 森則夫: 精神疾患とマイクログリア, *脳* 21, 16:15-22, 2013. [-]
2. 鈴木勝昭: 自閉症スペクトラム障害の脳病態の分子イメージング PET研究. *脳* 21, 16:186-192, 2013. [-]

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し, 共著者が当該教室に所属していたもの (学内の共同研究)

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し, 共著者が当該教室に所属していたもの

1. 梅田亜沙子, 惠藤絢香, 岩永竜一郎, 鈴木勝昭, 辻井正次: 発達障害児・者の感覚刺激への反応異常の評定 Sensory Profile について. *子どものこころと脳の発達*. 4:53-61 (2013.09)

(4) 著 書

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 森則夫, 杉山登志郎, 岩田泰秀, 亀野陽亮, 栗田大輔, 鈴木勝昭, 高貝就, 竹林淳和, 土屋賢治, 中里一貴, 横倉正倫, 涌澤圭介, 和久田智靖: *臨床家のためのDSM-5 虎の巻*, (2014.02)
2. 岩田泰秀: 第2章IV 自閉症の脳科学研究 高機能自閉症の成人におけるミクログリア活性化. 日本発達障害連盟編. *発達障害白書* 2014 年版. pp. 52-53(2013.09).

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し, 共著者が当該教室に所属していたもの (学内の共同研究)

1. 辻井正次, 明翫光宜, 松本かおり, 染木史緒, 伊藤大幸, 竹林淳和. ADHD の発見、診断のためのアセスメント、ADHD のバイオマーカー. *発達障害児者支援とアセスメントのガイドライン*, 金子書房, pp.282-285, pp.405-412 (2014.02).

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し, 共著者が当該教室に所属していたもの

(5) 症例報告

4 特許等の出願状況

	平成 25 年度
特許取得数 (出願中含む)	1 件

1. 登録番号: US 8518659 B2

出願名称: Method for determination of degree of risk of onset of high-functioning autism

発明者: 森則夫、中村和彦、鈴木勝昭、土屋賢治、岩田圭子、松崎秀夫

出願人: 国立大学法人 浜松医科大学

登録日: 2013 年 8 月 27 日

5 医学研究費取得状況

(万円未満四捨五入)

	平成 25 年度
(1) 文部科学省科学研究費	12 件 (2,260 万円)
(2) 厚生労働科学研究費	1 件 (0 万円)
(3) 他政府機関による研究助成	0 件 (0 万円)
(4) 財団助成金	1 件 (50 万円)
(5) 受託研究または共同研究	1 件 (7,980 万円)
(6) 奨学寄附金その他 (民間より)	0 件 (0 万円)

(1) 文部科学省科学研究費

1. 竹林淳和：文部科学省科学研究費 基盤C(継続),「ADHDのドーパミンD1受容体とミクログリアの定量解析-PETによる病態解明-」,H24-26年度,H25年度：80万円 (総額400万円)
2. 高橋太郎：文部科学省科学研究費 基盤C(継続),「出生時低酸素曝露ラットを用いた統合失調症ミクログリア仮説の検証」,H24-26年度,H25年度：150万円 (総額410万円)
3. 横倉正倫：文部科学省科学研究費 研究活動スタート支援(継続),「摂食障害者脳における新規トレーサーを用いたPET研究 活性化ミクログリアの検討」,H24-H25年度,H25年度110万円 (総額230万円)
4. 井上 淳：文部科学省科学研究費 若手研究B(継続),「強迫性障害を対象とした症状ディメンションに基づいた治療戦略」,H24-26年度,H25年度：70万円 (総額270万円)
5. 大隅香苗：文部科学省科学研究費 若手研究B(継続),「気分変動性障害に対する行動活性化療法の効果検討」,H24-H25年度,H25年度：110万円 (総額260万円)
6. 豊田志保：文部科学省科学研究費 挑戦的萌芽(継続),「自閉症スペクトラム障害者の感覚過敏に果たす脳幹のミクログリア活性化の役割」,H24-H25年度,H25年度：150万円 (総額290万円)
7. 岩田泰秀：文部科学省科学研究費 基盤B(新規),「統合失調症の遅発性神経炎症仮説の証明と予防法の開発」,H25-27年度,H25年度：600万円 (総額1420万円)
8. 和久田智靖：文部科学省科学研究費 基盤C(新規),「高機能自閉症者の脳内GABA濃度と各種臨床パラメーターとの関連性」,平成25年度-27年度：200万円 (総額380万円)
9. イスマール サンシーム：文部科学省科学研究費 基盤C(新規),「Exome Sequencing to identify novel candidate genes for autism」,平成25年度-27年度：270万円 (総額390万円)
10. 藤田梓：文部科学省科学研究費 基盤C(新規),「自閉症の脳内ドーパミンD1受容体の機能変化に関するPET研究」,平成25年度-27年度：150万円 (総額390万円)
11. 飯田妙子：文部科学省科学研究費 挑戦的萌芽(新規),「自閉症スペクトラム障害のセロトニン系・コリン系に及ぼす活性型ミクログリアの影響」,平成25年度-26年度：140万円 (総額290万円)
12. 望月洋介：文部科学省科学研究費 若手B(新規),「摂食障害に対する認知行動療法における脳部位間機能的結合-機能的時期共鳴画像による研究」,平成25年度-26年度：230万円 (総額320万円)

(2) 厚生労働科学研究費

1. 鈴木勝昭：厚生労働省科学研究費補助金障害者対策総合研究事業 #H24-精神、一般-010 「成

人期以降の発達障害者の相談支援・居住空間・余暇に関する現状把握と生活適応に関する支援についての研究」、(H24－26 年度)、分担、(代表：辻井正次、9,240 千円)

(3) 他政府機関による研究助成

(4) 財団助成金

1. 岩田泰秀：統合失調症研究会 第 9 回研究助成 「統合失調症脳内におけるミクログリア活性化機序の検討」：50 万円

(5) 受託研究または共同研究

1. 森則夫：脳科学研究戦略推進プログラム＜課題 F＞：精神・神経疾患の克服を目指す脳科学研究「自閉症の病態研究と新たな診療技法（診断・予防・治療）の開発」H23～27 年度, H25 年度：7,980 万円

6 新学術研究などの大型プロジェクトの代表、総括

7 学会活動

	国際学会	国内学会
(1) 特別講演・招待講演回数	0 件	0 件
(2) シンポジウム発表数	0 件	7 件
(3) 学会座長回数	0 件	4 件
(4) 学会開催回数	0 件	1 件
(5) 学会役員等回数	0 件	7 件
(6) 一般演題発表数	2 件	

(1) 国際学会等開催・参加

- 1) 国際学会・会議等の開催
- 2) 国際学会・会議等における基調講演・招待講演
- 3) 国際学会・会議等でのシンポジウム発表
- 4) 国際学会・会議等での座長
- 5) 一般発表

口頭発表

ポスター発表

1. Yokokura M:Depiction of microglial activation in the living human brain by different TSPO tracers, *Neuroscience2013*, 2013.11, サンディエゴ(USA)
2. Yokokura M:Imaging of microglial activation in the living human brain using a new PET tracer [11C]DPA713, *The 15th Conference of Peace through Mind/Brain Science*, 2014.2, 浜松市

(2) 国内学会の開催・参加

- 1) 主催した学会名
 1. 森則夫：第 40 回日本脳科学会, 浜松市 (2013.9)
- 2) 学会における特別講演・招待講演

3) シンポジウム発表

1. 横倉正倫 : In vivo imaging of neuroinflammation using a new PET tracer [^{11}C]DPA713, *Neuro2013*, 京都市(2013.6)
2. 岩田泰秀 : PET で見た精神神経疾患の脳におけるミクログリア活性化, 第40回日本脳科学会, 浜松市 (2013.9)
3. 鈴木勝昭 : ミクログリア活性のPETによる画像化: 精神疾患への応用. トピックフォーラム10『酸化ストレス・炎症から解く精神神経疾患』 第109回日本精神神経学会学術総会, 福岡市 (2013.5).
4. 鈴木勝昭 : 自閉症スペクトラム障害の病態基盤—子どものこころの発達研究センターによる知見から—, イブニングセミナー『自閉症スペクトラム障害の研究と支援の最前線』 第110回小児精神神経学会, 名古屋市 (2013.11)
5. 栗田大輔 : 神経性無食欲症の身体管理マニュアルによる治療効果, 第40回日本脳科学会, 浜松市(2013.9)
6. 栗田大輔 : 精神科医でも実践可能な神経性無食欲症身体管理マニュアルの開発, 第21回日本精神科救急学会, 東京都(2013.10)
7. 栗田大輔 : 精神科医でも実践可能な神経性無食欲症身体管理マニュアルの開発, 第17回日本摂食障害学会, 神戸市(2013.11)

4) 座長をした学会名

1. 森則夫 : 第40回日本脳科学会, 浜松市 (2013.9)
2. 森則夫 : 第110回小児精神神経学会, 名古屋市 (2013.11)
3. 竹林淳和 : 第17回日本摂食障害学会学術集会, 神戸市 (2013.11)
4. 和久田智靖 : 第17回日本摂食障害学会学術集会, 神戸市 (2013.11)

(3) 役職についている国際・国内学会名とその役割

1. 森 則夫 : 日本脳科学会 : 理事長
2. 森 則夫 : 日本精神科救急学会 : 理事
3. 森 則夫 : 日本生物学的精神医学会 : 評議員
4. 鈴木勝昭 : 日本生物学的精神医学会・評議員
5. 鈴木勝昭 : 日本児童青年期精神医学会・評議員
6. 岩田泰秀 : 日本生物学的精神医学会・評議員
7. 竹林淳和 : 日本生物学的精神医学会・評議員

8 学術雑誌の編集への貢献

	国 内	外 国
学術雑誌編集数 (レフリー数は除く)	1 件	1 件

(1) 国内の英文雑誌等の編集

森則夫、Journal of Brain Science (日本脳科学会)、編集長、CiNii 登録、IF なし。

(2) 外国の学術雑誌の編集

森則夫、Molecular Autism (Bio Med Central)、副編集長、PubMed 登録、IF なし。

(3) 国内外の英文雑誌のレフリー

1. Molecular Psychiatry (USA), 1 回
2. PLoS One (USA), 1 回
3. Brain Research (UK), 1 回

9 共同研究の実施状況

	平成 25 年度
(1) 国際共同研究	1 件
(2) 国内共同研究	1 件
(3) 学内共同研究	3 件

(1) 国際共同研究

1. 構造 MRI を用いた自動診断システムの開発、IoP (Institute of Psychiatry、ロンドン大学、イギリス)、平成 21 年度～、国際共同研究

(2) 国内共同研究

1. 理化学研究所、大阪大学、金沢大学、中京大学、福井大学、弘前大学との子どものころに関する共同研究
 - ① 自閉症の臨床遺伝
 - ② 脳画像
 - ③ 疫学研究 他

(3) 学内共同研究

1. 分子イメージング先端研究センターヒトイメージング、尾内康臣教授との PET 研究
2. 解剖学講座、佐藤康二教授との自閉症モデル動物に関する研究
3. 光量子医学研究センター光環境医学研究分野、簗島伸生教授との自閉症のチップ解析研究

10 産学共同研究

	平成 25 年度
産学共同研究	0 件

11 受賞

12 研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

13 この期間中の特筆すべき業績、新技術の開発

14 研究の独創性、国際性、継続性、応用性

15 新聞、雑誌等による報道

1. 竹林淳和：「食後の葛藤優しく包む」 中日新聞 2014 年 1 月 23 日